様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ４ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５１０３７６

研究課題名（和文）戦後農村女性のサブシステンス活動にみる農本的思想の特質とその構造

研究課題名（英文）The Direction of Social and Domestic Changes Through Networking Movements by Rural Women

研究代表者
大石　和男（OISHI, Kazuo）

京都大学・（連合）農学研究科（研究院）・助教

研究者番号：２０３３５３００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1990年代に誕生した農村女性ネットワークに着目し、この事例を＜自己決定＞を目指すサブシステンス活動の一種として捉えた上で、事例がどのような時代的特性をもった変革思想（＝農本思想）として位置づけられるのかについて、ネットワーク参加者を事例としつつ、思想分析の観点から明らかにすることを目的とした。
その結果、インフォーマント各々の動機形成過程の詳細、および変革の方向性として３種のタイプが見いだせることが明らかとなり、その研究結果を「『農村女性ネットワーク』にみる変革の志向性とその形成過程　－『田舎のヒロインわくわくネットワーク』を事例に－」と題した学術論文として発表した。

研究成果の概要（英文）：This research’s target is the new women’s movement, which is named the RURAL HEROINE NETWORK (RHN). The research aims to clear the direction of women’s thoughts that are combined with aspiring to social and domestic change through networking. In addition, it will specify the process of these thoughts as they have matured.
Six women who have belonged to the RHN were investigated, and their life-stories were assembled especially with regard to their motivation to participate in the RHE, the process of developing their thoughts that are intended to change social and domestic problems, and the direction of their thoughts.
In conclusion, it is clear that not only gender issues, but also general problems related to the regional situation, food issues, or the suppression of agriculture tended to develop their minds as they pursued various changes. Finally, three categories of their thoughts are specified based on the regional sector, the intended group, and domestic matters.

研究分野：農本思想

キーワード：農村女性　ネットワーク　社会変革　田舎のヒロイン　農本思想

１．研究開始当初の背景

近年の農村女性によるさまざまな活動は、しばしばエンパワーメントなどの用語と共に説明されてきた。だが、＜農＞のもつ様々な機能と効用を再認識し、その重要性を訴える思想や実践との結合がこれらの事例では広範囲にみられるにも関わらず、従来の研究では、両者の結びつきにはあまり目をむけてこなかった。したがって、農村女性の活動を、社会変革の思想という観点から捉えた研究は蓄積の薄いままとなっていることが指摘できる。

こういった中、本研究で取り上げる農村女性ネットワークは、古くからからみられる農村女性によるネットワーキングの主流形態、たとえば農協（ＪＡ）婦人部や地域婦人会、生活改善グループといった地縁型の団体を通じて得られるネットワークとは異なり、階梯的な組織構成の原理をもたない、自発的でフラットな人間関係のネットワークとして誕生したものである。このメンバーの中には、後に女性議員や女性起業家などの形で注目を浴びるようになった人物が多数含まれており、90 年代における農村女性のネットワーキング・ブームを生み出した先駆的な存在であると同時に、「雪印 100 株運動」に代表されるように、さまざまな自己と社会の変革を目指す思想と実践を生み出してきた。

このネットワークが、現状打破(breakthrough)を求める農村女性の潜在的な欲求を掘り起こし、彼女たちの活動意欲に火をつける形となったことの経緯やその後の活動展開については、すでに先行研究（大石、2007）においてその特異的な性格が明らかにされている一方で、この事例を普遍性という観点から分析しそこから一般的な特徴を析出することは、事例の性質を鑑みると容易なことではない。

そこで、この事例を＜自己決定＞を目指す活動（＝サブシステンス活動）として捉え、さらに「農村女性ネットワーク」という鍵概念を伴った変革思想（＝農業本位の思想）の一種として位置づけた上で、そこに見られる実践と思想の特質の解明を目指すことを、この研究の基本的な構想とした。

２．研究の目的

本研究では、1990 年代に（行政等に一切依存しない）自発的な形で誕生した農村女性ネットワーク（「田舎のヒロインわくわくネットワーク」）に着目し、この事例を農業本位の思想（＝農本思想）を体現した活動の一種として位置づける。そして従来の農村女性に関する研究を一歩押し進め、農業本位の思想にみられる歴史的動態や各種要素の発現形態を踏まえつつ、それらが農村女性をとりまく環境としてどのように作用してきたのか、および、農村女性の活動がどのような時代的特性をもった変革思想として位置づけられるのかについて、このネットワークの参加者を事例としながら、思想分析の観点から明らかにすることを目的とする。

本事例は、農村女性によるネットワーキング・ブームの先駆けとなったこともあってジェンダー研究における先行研究でもいくつか取り上げられてきた。まず靏理恵子は、80 年代以降の「農家女性の活動をとおして、女性たちがどのようにエンパワーしてきたのかに着目」しており、「活動に伴い、女性本人に、また家族・地域社会との間に生じるさまざまな葛藤や矛盾に、どのように対処してきたのか」について焦点を当てる。そして全国 11 の女性グループ（地域団体:９、全国ネットワーク:2）のひとつとして「田舎のヒロイン」に着目しながら、活動上の規範の特質や、家・ムラとの緊張関係について考察を行っている（靏、2007：202-222）。

これに対して原（福与）珠里は、パーソナルネットワーク論を用いた上で、①イエ・ムラ論では捉えられない女性個人の社会関係や主観的な生活世界の抽出、②ネットワークの規定および阻害要因、③ネットワーキングにおける選択行為のもつ意味、等を研究課題に掲げ、事例の一部として「田舎のヒロイン」茨城支部の参加者を取り上げている。

また上記以外では、冨士谷あつ子の『日本農業の女性学 ： 男女共同参画社会とエコロジカル・ライフをめざして』にも「田舎のヒロイン」について触れた内容がみられる（冨士谷、2001）。

最後に大石和男（2007）では、ネットワーク結成当初にみられたエンパワーメントへの指向性が後年になって薄れていき、代わりにさまざまな変革活動へと軸足の移されていった様が明らかにされている。ただしその理由や詳しい実態については十分に解明されてはいないため、本稿では下記の課題を設定することによって、この論点の解明に貢献することを目指した。

３．研究の方法

（１）本事例の位置性

農村女性のネットワーキングと社会変革活動の結合を考えるに際しては、佐藤慶幸や天野正子らが 1980-90 年代に行っていた「生活クラブ生協」を巡る研究（たとえば佐藤ほか、1995）が参考になる。この研究では「主婦」としての女性を中心とした生協活動において、ネットワーキングと社会変革活動が重要な活動の柱となっている実態について注目しており、本稿と比較的近い着眼点をもつ研究と言える。

この研究をもとに、本稿との事例の性格の違いを考えてみた場合、社会的属性の違い（都市部の「主婦」or 農村女性）に加えて、変革活動の準拠枠としての意味が両者で大きく異なっている点を挙げることができる。

「生活クラブ生協」では、メンバー（職員を含む）による社会変革運動は、基本的にこの組織の枠内にて行われるか、新たに枠内に取り込まれることによって遂行されていく。若干の例外はあるものの、総体としてみるならば「生活クラブ生協」に関連した変革活動は、組織という活動枠組みに大きく規定されたものとして捉えられる。

これに対して「田舎のヒロイン」では、2002年に発生した大規模食中毒事故の後に取り組まれた「雪印 100 株運動」のように、「田舎のヒロイン」が主導した例もあるとはいえ、このような事例は決して多くはなく、活動内容がおおむね３年に１回開催される全国集会を基軸としていることからもわかるように、日々の細やかな実践活動を組織・運営していく体制はあまりとってこなかった。それゆえに、各人がそれぞれの裁量において日常的に取り組む活動こそが重要となっており、「田舎のヒロイン」はそのような活動の方向性を社会的な観点から模索・提案し、メンバー相互の交流を通じて刺激を享受し合い、各人の活動成果を披瀝する場として機能していた。そして全国に散らばった参加者たちは、各人の保有する活動資源を活かしながら、日常活動の中でさまざまな課題に取り組み、活動を練り上げて展開していったのである（大石、2007）。

したがって参加者がこれらの自主的な活動を構築する際に、「田舎のヒロイン」のもたらすネットワークは有用な資源にはなりえても、活動の枠組みを規定する力（＝準拠枠）とはならなかった。それゆえに、「田舎のヒロイン」のもたらした「農村女性ネットワーク」という思想の影響力とその射程を把握しようとするならば、参加者の個人レベルでの変革活動を詳細に把握することが重要な作業となる。

（２）課題と方法

本研究では分析に際して個々の構成員と「田舎のヒロイン」の関係性だけに論点を限定するのではなく、メンバーによる農的および社会的活動を含んだライフ・ストーリー全般についての聞き取りを行い、その上で自己と社会の変革思想がどのように醸成され、展開されてきたのかについて包括的な把握を試みる。

その際、「田舎のヒロイン」と参加者との関係性については、あくまでもライフ・ストーリー上のひとつの出来事として記述するに留め、関心の中心は変革思想の醸成過程に置くものとする。その上で、インフォーマントの有する変革指向性がどのような社会的・個人的領域に向けられているかについて、その傾向を明らかにすることを課題とする。その上で、＜自己および社会の変革方向＞および＜変革に向けた動機の形成過程＞という分析視角を設定し、これらの要素が農村女性の諸活動の形成とどのような関係を形成しているのかについて、その構造を明らかにすることに注力して分析を行った。

聞き取りは「田舎のヒロイン」のメンバーの中から農的および社会的な活動を顕著に認めることのできる人物を選定して 11 名に対して実施し、論文の執筆に際しては、その中から活動内容の多様性を考慮しつつ６名を取り上げて分析を行った。データは 2014-15 年に行った調査結果を中心としつつ、それ以外の時期のデータも補足的に用いている。

４．研究成果

（１）分析結果

調査結果から、参加者たちが（「田舎のヒロイン」への参加を含む）変革活動に従事するに際して影響があったと考えられる環境要素と、その後の活動展開の内容をまとめることができた（結果については、表１に一部掲示）。そしてこれらの結果をもとに、変革の指向性の違いについての分類を考えたところ、①地縁集団型、②任意集団型、③ドメスティック型、という３類型をひとまず抽出することができた。

このうち、①は集落や旧町村地区といった枠組みを利用して変革目標を設定するパターンであり、②は気のあった仲間などで経済活動や社会活動などを営むパターンである。①と②の違いについては、もちろん個人的な指向性の差も大きく関係するものの、それ以外に居住地域の環境（都市部 or 農村部）の違いによる影響も大きく、変革に向けた集団の組織方法や活動目標が立地条件によって変化している様を見て取ることができる。

やや方向性の異なっているのは③であり、これは経営体や生活の場を舞台とする変革指向として理解できる。ここでは変革の対象は社会よりもまず自己に対して向けられており、それは時として自己の経営発展とも方向性を同じくする。ただし、それが単なる営利追求に終始するのであれば、おそらく「田舎のヒロイン」とは相容れない存在となり、長くこのネットワークと関係を維持することには繋がらなかったものと思われる。数少ない事例から断定することは困難であるものの、本稿に登場する希世子さん・聖子さんの事例では、常に自己を高めていこうとするストイックな性格が強く見られることに加え、得られた経験を集会や本などさまざまな機会を捉えて人に伝えていこうとする傾向があり、このような姿勢をもつ女性たちが③のグループを形成しているように思われる。

以上をまとめると、本研究では実態調査と分析の結果から、インフォーマント各々の動機形成過程を解明することができたと同時に、変革の方向性として３種のタイプ（「地縁集団型」「任意集団型」「ドメスティック型」が見いだせることを明らかにした。

表１　調査および分析結果（一例）

	氏名（仮名）	珠美さん	歌子さん
家庭での立場	舅姑関係	義父母とも厳しい面があり、直売店開設後も父母の農作業の手伝いを優先していた	義父との関係は良好で、義母はあまり農作業には従事しなかった
	サイフ（およびその継承）	義父は生前はサイフを手放さなかったが、生活費は潤沢にもらえた。小遣いは少ない	結婚して3～4年後に譲り受けた
「田舎のヒロイン」に関して	参加時期	1996（第2回）	1999（第3回）
	全国集会参加回数	5回（96,99,02,05,13年）	3回（98,05,08年）
	参加のきっかけ	第1回に参加した人の記事を読んでおり、その後に、第2回集会の開催告知を新聞記事で見つけて	熊本県農業女性アドバイザー在任時に県職員から開催情報を知らされて
	家族からの参加同意のとりつけ	初回集会時には義父母・夫に頭を下げて参加、直売所開設以降は自由度が増す	もともと義父母・夫ともに外部で活動することに寛容な態度
	雪印100株運動	不参加	参加
	NPOでの役職経験	なし	なし
社会活動	活動および役職経験	福岡県女性農村アドバイザー 福岡県指導農業士 福岡県農業・農村振興審議会委員 農林水産省食料・農業・農村政策審議会委員 福岡県男女共同参画審議会委員	JA女性部部長 JA熊本市女性部副部長 熊本県農業女性アドバイザー 熊本市認定農業者協議会副会長 熊本ツーリズムコンソーシアム 熊本市農とぴあ事業
	立ち上げに関与した活動	「田舎のヒロイン」九州集会（支部大会） 直売所「ぶどう畑」 農業塾 「農業生産法人合同会社みな月」	「田舎のヒロイン」熊本集会（支部大会） 「フレッシュ河内」 「（株）オレンジブロッサム」
変革の指向性	地縁集団型		◎（旧町域）
	任意集団型	◎	
	ドメスティック型		

注1）変革の指向性については、◎、○、空白、の3段階で強さを表記した

（２）考察および残された課題

先行研究にまつわって最後に触れておきたいのは、本研究と鬻（2007）との関係についてである。鬻は「田舎のヒロイン」をとりまく緊張関係として「家との緊張関係」を「高い→低い」、「ムラとの緊張関係」を「低い（→高い→低い）」と判断しており、この分析は参加メンバーの平均値としてみるならば、筆者の認識と大きく異なるものではない。

ただし本研究で示してきたように、「田舎のヒロイン」のメンバーは家庭内外において抑圧状況を強く認識していた者もいれば、逆に比較的自由に振る舞ってきた者もおり、その実態は安易な平均化を許さないほど多様な実態をもつことが明らかとなっている。したがって思想論的にみた場合、抑圧状況とその後の変革活動との関係については、これを一義的に論じるのではなく、抑圧を抱えた者と自由に振る舞えた者のパターンを切り分けるなどして、変革に向けた思想の熟成過程とその影響要因を複数のパターンとして抽出することが重要であると思われる。

いずれにせよ鬻が着目した緊張関係という視点は重要であり、本稿ではこの点を十分に考察することはできなかったものの、「田舎のヒロイン」の参加者にさまざまな動機と方向性を有する変革志向が併存していることを、より深く解明していこうとする際には大きな手がかりになるものと思われる。この点については残された課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

大石和男、2016「『農村女性ネットワーク』にみる変革の志向性とその形成過程　－『田舎のヒロインわくわくネットワーク』を事例に－」『生物資源経済研究』第 21 号、51-71 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

大石　和男（OISHI, Kazuo）
京都大学大学院農学研究科・助教
研究者番号：20335300